

# 非還元的個人主義について再考する

：批判的实在論の視座から

福 士 正 博

## I はじめに

「それらを創造しようとする共通の意思がないにもかかわらず、諸制度が生起できるというのはどのようなことなのだろうか。それがおそらく社会科学の最も重要な問題である」  
(カール・メンガー)

『社会的創発性 複雑系としての社会』(2005)を書いたキース・ソーヤーは、本書を執筆した動機について、個人と社会構造の関係という古くから問われてきた社会科学の関心が背景にあったことを率直に述べている。それでは、誰が社会諸制度を作り上げたのか。ソーヤーがメンガーを冒頭で引用しているのは、この文章に、自らの関心が端的に表現されていると考えていたからである。「誰かが意識的に企てたのではないにもかかわらず、複雑な社会システムはどのようにして生まれたのか」という問いは、生まれた時から社会という制約を受け(「社会的事実」としての社会)、その下で生きることを半ば強制されている人間であるからこそ、あえて「どのように生きるか」を問わなければならないという関心へつながっている。この関心はこれまで、ミクロ-マクロ論争とか、個人主義-全体主義論争、構造-エージェンシー論争など、個人主義と集団主義の緊張という構図の中で議論されてきた。ソーヤーは、この課題を正面から受けとめ、それに応えるために、非還元的個人主義(nonreductive individualism)という独自の立場から論争に参加しようとした。意識していたわけでもないにもかかわらず、自らの生活に襲いかかってくる社会という「外的」存在を剔抉するには、演繹や帰納などの伝統的手法ではなく、説明と予測が難しい創発性という新たな概念で組み立てられた構図の中で向き合う必要がある、そうでなければ複雑な社会の構造を明らかにすることはできないのではないかという関心である。彼の関心はここから更に、社会科学のあり方や方法論にも向けられようになった。

ソーヤーはこの関心を、たんなる創発性ではなく、社会的創発性(social emergence)として、社会の領域に適用し、社会的性質(S: social property)と個人的性質(I: individual property)の関係という機能主義の中で具体化しようとした。ソーヤーが主張する非還元的個人主義は、この関係を軸に組み立てられた独自の概念とすることができる。その一方、ソ

ソーヤーのこの概念には、社会は諸個人の実践に依存しながら、しかし、それに還元することはできないという（非還元主義）、一見すると矛盾している考えも同時に含まれていた。そのため、非還元的個人主義を評価する場合、この矛盾の理解とその意味を解くことが欠かせなくなる。言うまでもなく、社会的性質を明らかにすることは社会の性格を明らかにすることにはかならない。この課題はそもそも、社会的性質が独自に存在し、様々な要素に対して因果的影響力を発揮する存在論であることを論証することにある。ソーヤーは、この課題にうまく取り組むことができなければ、社会という複雑系を解剖することができないと考えていた。とくに、この課題に一定の見通しをもつことができなければ、第1波のパーソンズに代表される構造機能主義と第2波の一般システム理論の後に登場した第3波の複雑系理論の段階にうまく対応することができないと考えられていた。複雑系理論のこの段階の基軸をなすと考えられたのが社会的創発性である。ソーヤーは、この概念の意義を明らかにするために、個人主義の立場から、しかし、それに還元せず、新たな手法で論証することのできる理論を探していた。問題は、機能主義を前提に、社会と向き合うのが個人（主義）であってよいのか、そのことで果たして社会的創発性が生まれるメカニズムの解剖につながるのかということにある。

社会的創発性を論じるとき、明らかにしなければならない論点が二つある。ひとつは、創発性が低いレベルからどのようにして高いレベルの性質として活かされるようになったのかという生成メカニズムを明らかにすること、もうひとつは、高いレベルの性質が他の性質に影響力を及ぼす因果力をもっているのかどうか、すなわち、上向き因果と同時に、独自の下向き因果力をどのようにもつようになったのを明らかにすることである。還元的物理主義と非還元的物理主義や非還元的個人主義の対立が、（社会的）創発性＝因果力という等式をめぐるものであったことを考えるならば、二つの論点は連動していることになる。社会的創発性研究のこの二つの論点は、社会の中で、社会とともに生きる我々にとって、その性格を明らかにしようとすることにかならない。ソーヤーの非還元的個人主義は、その性格を個人の性格から基礎づけようとしていた。

それでは、社会的性質（S）—個人的性質（I）の関係から社会的創発性を検出しようとしたソーヤーの姿勢は、社会的創発性理論を構築する上で正しい道と言えるだろうか。後に述べるように、心的性質（M）—物理的性質（P）の関係から心的性質の独自の存在を検出しようとした心の哲学の議論（とくに非還元的物理主義）を横滑りさせたソーヤーの方法には、吟味してみなければならないいくつかの問題が含まれている。第1に、非還元的個人主義は、ジェグオン・キムに代表される還元的物理主義を批判するために、機能主義の立場（性質二元論）から主張されたスーパーヴィニエンス、多重実現可能性、選言といった心の哲学における手法がそのまま社会的領域にも適用されている。しかし、そこでは、二つの領域の違いがあまり意識されていなかったために、この概念が平板のままとどまっている。そのことは、

第2に、物理的性質という「死んだ性質」と個人的性質という「生きている性質」との違いが意識されていないことから生まれている。非還元的個人主義の立場から社会的創発性を論じようとするとき、還元やスーパーヴィーンする対象は価値対象である物理的事象ではなく、人間という「価値を創造する生きた存在」である。そうであるならば、非還元的物理主義の議論を横滑りさせるという場合でも、両者の違いを意識し、それに相応しい構造の中で議論しなければ、創発性が浮かび上がってくることはない。問われているのは、彼が言う個人主義とはどのような個人（人間）認識にもとづくものなのかということにある。この問いを追究しようとするなら、人間諸個人やその性質であるエイジェンシーをそれ自体ひとつの実在として位置づけ、実在論として構成することが必要となる。個人的性質は実在から派生したものにはすぎない。非還元的物理主義が機能主義によって成り立っているといっても、それを横滑りさせているからという理由で機能主義をそのままあてはめてよいということにはならない。機能主義や性質二元論の是非があらためて問われている。

本稿の目的は、批判的実在論の立場から、心的因果の独自性を論証しようとした非還元的物理主義や、社会的創発性の検証を行おうとした非還元的個人主義の問題点を明らかにすること、具体的には、機能主義の立場から実現概念を軸に、スーパーヴィニエンス、多重実現可能性、選言といった手法を論じるだけでは還元主義批判と社会的創発性を論証しようという目的を十分に果たすことができないことを明らかにすることにある。還元的物理主義の立場に立つジェグオン・キムが、「非還元的唯物論は安定した立場ではない。あるのは、直接的な消去主義の方向か、明確な二元論の形態の方向に向けた圧力である」（Kim 1993b, 284）と述べ、物理主義の立場に立ちながら還元主義を批判する「どっちつかずの」状態にある非還元的物理主義を糾すには、還元主義を徹底する方向をとるのか、二元論の立場に立つかのどちらかしかないことを指摘している。本稿は後者の立場に立っている。批判的実在論の立場から非還元的個人主義の問題点を指摘するには、その立論構造を検討し、問題点の指摘と批判が必要となる。批判的実在論の立場から見ると、この課題はこれまで、アーチャーに代表される通時的創発性の議論の中で取り上げられてきた。しかし、批判的実在論の一部からこれまで、社会的創発性を、通時的にばかりでなく、共時的にも取り上げなければ、その全体像を理解することができないのではないかという指摘も行われてきた。還元的物理主義や、それを批判した非還元的物理主義や非還元的個人主義の議論も共時的な立論構造の中で創発性を探求している以上、この指摘は、通時的議論だけでは正面から彼らの考えを取り上げたことにはならないという疑問に根ざしたものとなっている。この疑問に答えるには、批判的実在論も、共時的社会的創発性理論を組み立て、通時的議論との整合性を図ることが求められる。そのことを考慮するならば、非還元的個人主義に対する批判ばかりでなく、批判的実在論による共時的創発性理論の構築というもうひとつの課題も本稿の目的に含まれていることになる。

## Ⅱ 非還元的個人主義と個人主義

社会的創発性を検出する上で、批判的实在論が非還元的個人主義の立論に無理があると考ええる最大の根拠は、個人主義に対する認識のあまさにある。社会的創発性を検出するために非還元的個人主義の立場に立とうとするソーヤーにとって、個人主義はどのような意味をもっているのだろうか。ソーヤーは、この目的を達成するために、社会的性質から個人的性質にスーパーヴィーンし、更にそこから新しい社会的性質にスーパーヴィーンする経路を想定することで、社会的性質を実現する個人的性質の基盤的役割を指摘している。還元的物理主義や非還元的物理主義の立論構造が、心的性質が依存する基盤として物理的性質を考えていたように、社会的性質の基盤をなす個人的性質の特徴を明らかにすることは、非還元的個人主義の立論構造を明らかにする上で最も大事な本質的課題であった。

一部の経済学や社会学のように、社会的創発性を方法論的個人主義の立場から論じる傾向は根強い。社会現象を個人の視点だけで考えることはできないのではないかという疑問も、社会学的説明は常に個人から社会への創発性の過程でなされるべきだという方法論的個人主義との親和性の中で消化されてきた。この考えは経済学や行動社会学などいくつかの影響力のある社会学理論、交換理論、合理的選択理論にはっきり現れている。しかし、この観点からすれば、「創発的社会的特性の存在を受け入れつつ、そうした特性は個人やその関係の点から行われるという説明に還元されるという主張」とどまってしまう、それ以上その先へ進めなくなってしまう。これでは、結局、還元主義の罠に陥り、社会的創発性の意義を明らかにすることはできなくなる。問題は、ソーヤーが言う存在論的個人主義が非還元的個人主義の立論構造の中で果たしている役割を明らかにすること、具体的には、非還元的個人主義を構成しているスーパーヴィニエンス、多重実現可能性、選言と親和的な個人主義の中身を批判的に明らかにすることである。

ソーヤーは、社会科学はこれまで、方法論的主張を支持しながら存在論的議論を行うという論理的誤りを犯してきたのではないかという認識から、その認識ときっぱり手を切ることを訴え、非還元的個人主義を提案した。社会的特性と個人的特性との関係を単純にマクロ-ミクロ関係に置き換え、マクロ現象はミクロ現象の集積したものと考えただけならば、そこでの個人主義は方法論的個人主義にすぎず、認識論的虚偽に陥ってしまう。両者の関係はどこまでも存在論的に、それを徹底するなかで行われなければならない。

そうであるなら、この場合の個人は、社会の中で、他者ととともに生きる、集団的性格を身につけた個人ということになる。ソーヤーが、創発性の集団主義的理論を追究しているのもそのためである。しかし、社会的創発性を検出する課題にとって、個人の集団的性格を指摘するだけでよいのだろうか。この疑問に応えるために、ソーヤーの立論構造の概要をここで整理しておくことにしよう。

最初に見ておかなければならないのは、スーパーヴィニエンスと個人主義との関係である。ソーヤーの立論構造におけるスーパーヴィニエンス基盤とは、存在論的個人主義に基礎づけられた個人的性質を指している。それでは、社会的性質と関係を結ぶ諸個人の性質が存在論的に基礎づけられているというとき、存在論的個人主義はどのような概念として用いられているのだろうか。還元的物理主義や非還元的物理主義に「物理は絶対である」という前提があるとすれば、その立論構造を援用した非還元的個人主義にも「個人は絶対である」という前提がついていることになる。すなわち社会的性質は個人的性質に基礎づけられ、絶対であるという前提である（「個人だけが存在するという存在論的立場」）。存在論的個人主義が、個人がどのように存在しているのかという問いから出発した思潮であることを考えるならば、個人であっても、他者から切り離された孤立した存在ではなく、集団的に、社会的に、全体主義的に生きざるをえないという意味で存在論的である。非還元的個人主義の立論構造を明らかにしようとするならば、この前提の意味を考察し、一定の見通しをもっておくことが重要となる。非還元的物理主義が物理主義でありながらそれに還元しない主張であるように、非還元的個人主義も、個人主義でありながら、それに還元しない主張であるからである。「個人主義でありながら」とは存在論的個人主義を意味し、「それに還元しない」とは方法論的個人主義であってはならないという主張が含意されている。ソーヤーの非還元的個人主義はこのように、認識論上の方法論的個人主義と存在論上の個人主義が明確に峻別されている。この峻別は、ソーヤーの存在論的個人主義が、存在論的個人主義のなかでも、方法論的個人主義をとまっている（ともなうこともできる）という考えをとる一部の論者と一線を画していることを意味している。

本稿のように、スーパーヴィニエンス、多重実現可能性、選言という一連の手法だけでは還元主義を根本的に批判したことにはならず、かなりの無理があることを指摘しようとする場合、その根底には彼の個人主義に対する疑問がある。この点を的確に突いているのは批判的実在論者アーチャーの次の指摘である。

「社会的実在論は、エイジェンシーと構造の両方のレベルでの創発的な諸性質の重要性を特に強調するが、しかも、それらを当該の階層に固有なものとして考察し、したがって、それぞれを互いに区別し、相互に還元不可能なものとして考察する。それは、伝統的な論争の用語をまったく新しいものに置き換える。還元不可能性とは、相異なる諸階層はまさにそれぞれの階層だけに属している性質と力の〔存在の〕ゆえに、定義からして分離可能なのだということを意味している。つまり、それぞれの階層から創発するものが、それぞれの階層としての分化を立証しているのである」（アーチャー 2007, 19-20）。

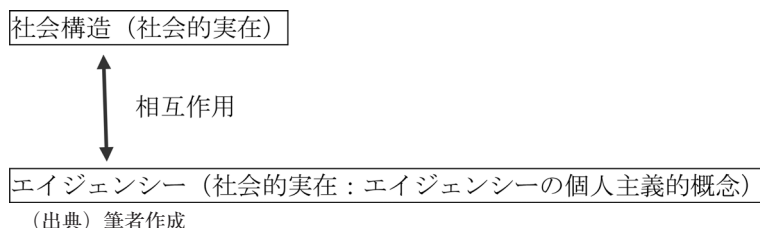
ここでアーチャーが述べていることは、社会的実在論とそこから生まれる彼女特有の分析



非還元的個人主義について再考する

的二元論である。図式的に描くと次のようになる。

第1図 社会構造とエイジェンシー



この図で最も重要なのは、社会構造もエイジェンシーも社会的实在として独立していること、その上で両者は相互に作用し合う関係にあることである。この図は、一見すると、社会構造とエイジェンシーが相互に作用し合う、構造化理論に見られる中心的合成理論と何ら変わりがないように見える。しかし、批判的实在論と構造化理論（中心的合成理論）とでは、社会構造とエイジェンシーをそれぞれ実在的存在と見るという点で決定的な違いがある。エイジェンシーを構成しているのは、社会構造と対峙するのが個人であっても、それは社会的实在としての個人であって、そのかぎりでは、「エイジェンシーの個人主義的概念」という性格をもっている。構造化理論は両者の二重性と相互浸透を追求しようとしている点で、二元論の立場から両者の相互作用を追求しようとしている批判的实在論と根本的に異なっている。構造化理論には存在論（实在論）がなく、それが理論の不安定さを招いている。

「分析的二元論は、これら二つの階層（注：社会構造とエイジェンシー）の間の相互作用を探究する方法である。それは、まさに二つが相互に独立し合っているから分析的であり、それぞれの階層がそれ固有の創発的性質をもつと見なされるから二元論的である。融合主義者たちによるこの分析的二元論の否定が、社会理論における中心的合成論を生み出すのである」（アーチャー 2007, 191-92）。

非還元的個人主義の問題点のひとつは、ここでアーチャーが指摘している中心的合成理論の誤りをソーヤーも犯していることにある。後に述べるように、非還元的個人主義が取り上げる社会的性質と個人的性質の関係は、スーパーヴィニエンスに見られるように、両者の相互依存関係、すなわち相互浸透という程度のものでしかない。両者の相互浸透関係を追求することで社会的創発性を検出しようとしたソーヤーの姿勢は、存在論的個人主義と言いながら、存在論（实在論）を欠いているという点で根本的な欠陥がある。非還元的個人主義が語る個人主義はせいぜい、「物理は絶対である」という認識を横滑りさせた、「個人は議論の余地なく存在している」という程度の、知覚主義を根拠とした経験主義の範囲の中にしかなく、

それ以上の深みがあるわけではない。

それでは、實在論の立場から個人主義を考察する深みとはどのようなものなのだろうか。第 1 に確認すべきことは、先に述べたように、その考察が、ソーヤーの言う「個人主義の集団理論」について検討することではないことである。個人主義を集団概念から説明しようとしても、方法論的個人主義を正面から批判したことにはならない。デュルケムのように、個人ではもちえない特性を、結合意識や所謂「集合沸騰」によって集団があらたな特性を持つようになることを考えることはできるかもしれない。しかし、そのことを創発特性と呼ぶことは到底できない。創発特性は社会的實在からその特性として現われてくるものだからである。したがって、第 2 に、個人を社会的實在として考察することは、實在が持つ特性を個人がどのように受け継ぎ、社会構造とエイジェンシーの相互作用の中で因果力を発揮するようになるのかを明らかにすることにある。それこそが両者の相互作用の具体的中身を明らかにすることにほかならない。本来、社会的實在としての個人（エイジェンシー）の役割を明らかにすることは、共時的創発理論の中で果たすべき課題である。しかし、批判的實在論はこれまで、この点に関する限り、アーチャーの分析的二元論に見られるように、「ある階層の性質と力は、〔その資質を創発させた〕他の階層のそれらに先行する。なぜなら、まさに前者が後者から時間の経過のなかで創発するのだから」（アーチャー 2007, 197）というように、共時的ではなく、通時的に、したがって時間軸を入れて歴史的に考察することで済ませようとしてきた。この意義はもちろん大きい。しかし、その一方、批判的實在論に求められているのは、こうした通時的議論を共時的議論で補完し、批判的實在論の社会的創発性の議論を強化することである。

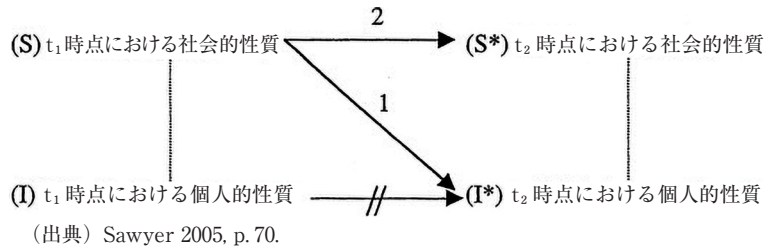
すでに述べたように、ソーヤーは、社会的創発性を検出するにあたって、機能主義の立場から、スーパーヴィニエンス、多重実現可能性、選言などの手法の意義を明らかにすることで、この課題に接近しようとしてきた。以下、この説明方法が有効であるのかどうかについて検討してみよう。

### Ⅲ 非還元的個人主義の立論構造 (1)：実現

最初に、ソーヤーの非還元的個人主義の立論構造を確認しておくことにしよう（第 2 図参照）。ここでの課題は、 $t_1$  時点での社会的性質 (S) が  $t_2$  時点での社会的性質 (S\*) に転換する経路としてどのようなものがあるか、そしてそれぞれの経路の意義とは何かを明らかにすることにある。図は、この課題を達成する上で、想定しうる経路が二つあることを示している。二つの経路についてソーヤーは次のように述べている。

1 の経路：「 $t_1$  時点での社会的性質 S は、 $t_1$  時点でのスーパーヴィニエンス基盤 I が法則的に I\* を原因づけていないとしても、 $t_2$  時点の個人的性質 I\* を法則的に原因づける」

第2図 社会的、個人的因果関係



(Sawyer 2005, p. 71)。

2 の経路：「 $t_1$  時点での社会的性質 S は、 $t_1$  時点でのスーパーヴィニエンス基盤 I が  $t_2$  時点でのスーパーヴィニエンス基盤 I\* や、 $t_2$  時点での社会的性質 S\* を法則的に原因づけなくとも、 $t_2$  時点の社会的性質 S\* を法則的に原因づける」(Ibid.)。

1 の経路は、 $t_1$  時点での社会的性質 S が  $t_2$  時点の個人的性質 I\* の原因となり、I\* から  $t_2$  時点での社会的性質 S\* にスーパーヴィーンすることによって S\* を実現することである。2 の経路は、 $t_1$  時点での社会的性質 S が  $t_2$  時点での社会的性質 S\* の直接的原因となることによって S\* を実現することである。「S が原因となる」という表現には、S に因果力が備わっていることが含意されている。なお、 $t_1$ 、 $t_2$  は時間の経過を表わしているから、一見すると、通時的創発性が考察対象となっているように思えるが、ここではあくまで共時的な説明に限定し、時間の経過はいったん無視しておくことにする（非還元的個人主義の立場から 2 の経路が成立するかどうかについては後述。ここではこの点についてもいったん保留しておくことにする）。

ソーヤーが二つの経路を想定するとき、そこには重要な前提が置かれている。すなわち、二つの経路のどちらにおいても、「 $t_1$  時点での社会的性質は、 $t_1$  時点でのスーパーヴィニエンス基盤 I が、法則的に I\* を原因づけていないとしても……」と述べられているように、S の基盤である I と S\* の基盤である I\* とのつながりを否定し、その前提で、どちらも S と S\* とのつながりが模索されていることである。図の  $I \nrightarrow I^*$  がこのことを端的に表わしている。直接的であるか、間接的であるかの違いがあるにせよ、S と S\* は  $I-I^*$  を通らずにつながり、社会的性質が独自の存在として因果力を備えている根拠のひとつとなっている。I と I\* とのつながりを否定できるのは、その前の S と I との関係を視野に入れなくても、S から S\* の転換が可能であることを想定しているからである。逆言すれば、I と I\* とのつながりを認めることは、S の基盤として、I に還元するにせよ、スーパーヴィーンするにせよ、そこを通過しなければ S\* の成立につながらないことを意味している。還元主義の立場からすれば、I と I\* の関係を否定することによって、S から S\* への転換を明らかにすることが



どうして可能になるのかという根本的疑問が生じる。問題の核心はこのように、非還元的個人主義が、 $I-I^*$  のつながりを否定しても、 $S$  から  $S^*$  への転換を説明することができるとする理由にある。ソーヤーは、この経路の想定について心の哲学の議論から援用したものであることを率直に認め、次のように述べていた。

「心的因果性の議論は、具体的な哲学的形式をとっていた。すなわち、心的性質の実現する物的性質と、原因づけられた物的性質との間に法則的、因果的性質がなかったとしても、心的性質と物的性質との間に法則的な因果的關係はありえるのである。以下で、私は、社会的因果性を擁護するために、心の哲学からこの議論の構造をあてはめてみることにする」(傍点引用者, Sawyer 2005, p. 70)。

この中に、非還元的個人主義の主張の意義を明らかにする上で重要な二つのことが述べられている。ひとつは、「心的性質の実現する物的性質と、原因づけられた物的性質との間に法則的、因果的性質がなかったとしても」と述べられているように、心的性質と物理的性質との法則的、因果的関係を否定すること（「橋渡し法則 bridge law」の否定）、すなわち、両者が還元的関係にあるという還元的物理主義者の主張を必ずしも必要としていないこと、もうひとつは、それにもかかわらず、「心的性質と物的性質との間に法則的な因果的關係はありえる」というように、否定された還元関係に代わる別の法則的、因果的関係の可能性を模索していることである。後に述べるように、物理的還元論者からすれば、物理的基盤  $P$  が別の物理的基盤  $P^*$  に転換することは法則的必然であり、したがって個人的性質  $I$  が別の性質  $I^*$  に転換することもまた同様である。だからこそ、「法則的、因果的性質がなかったとしても」というように、両者の法則性を否定することがどのようにして可能になるかが根本的に問われることになる。還元論と非還元論の違いや、機能主義にもとづいたスーパーヴィニエンスや多重実現可能性、選言の意義が問われるのはそのためである。そのため、非還元論による批判と必要な説明もまずここに向けられる。この点についてソーヤーは次のように述べている。

「非還元的個人主義は、自律した社会的因果性に準じた議論を行っている。非還元的個人主義は、社会的性質の因果的結果が個人的スーパーヴィニエンス基盤を実現する点から得られることを受け入れている。しかし、(多重実現可能性にしたがうならば)、粗野な選言のために、 $I$  が  $I^*$  の原因として適法に同定することができない場合であっても、 $t_1$  の時点でのスーパーヴィニエンス基盤  $I$  を持つ社会的性質  $S$  が  $t_2$  の時点での社会的性質  $S^*$  や個人的性質  $I^*$  の原因として適法に同定することができることがある。社会的性質の個人的レベルでの等価物が粗野な選言であるとすれば、 $I$  や  $I^*$  の点での説明は、たとえ  $S$  や  $S^*$  の関係が法

非還元的個人主義について再考する

則にしたがっている時であっても、必ずしも法則にしたがっているという必要はない。スーパーヴィニエンスは、社会的因果が個人レベルでの介入メカニズムを通して効果を持つという意味が含まれている。しかし、そうしたメカニズムが必然的に存在しているにもかかわらず、多元の実現性や粗野な選言は、我々がけっして法則的やり方で基盤となる因果的關係を述べることができないということを示唆している。粗野な選言が得る複雑系において、方法的な個人主義的説明は原理的に不可能なのである」(傍点引用者, Sawyer 2005, p. 70.)。

この引用文から、ソーヤーが、スーパーヴィニエンス、多重実現可能性、粗野な選言という三つの基礎的概念について、それぞれが何を目指し、どのような役割を果たすものと位置づけていたのかを知ることができる。とくに、「粗野な選言のために、 $I$  が  $I^*$  の原因として適法に同定することができない場合であっても、 $t_1$  の時点でのスーパーヴィニエンス基盤  $I$  を持つ社会的性質  $S$  が  $t_2$  の時点での社会的性質  $S^*$  や個人的性質  $I^*$  の原因として適法に同定することができることがある」と述べられている部分が、スーパーヴィニエンスや多重の実現可能性の限界を乗り越える可能性を秘めているという点で重要である。繰り返し述べているように、明らかにしなければならないのは、「 $I$  が  $I^*$  の原因として適法に同定することができない場合であっても」、 $S$  から  $S^*$  への転換を法則に適った形で同定することが可能である理由である。その理由を説明する基礎として考えられたのが機能主義とそれにもとづいた性質実現論であった。非還元的物理主義の、物理的性質による心的性質の実現という「性質による性質の実現」を主張していたことを受け、非還元的個人主義は、個人的性質による社会的性質の実現を主張しようとしていた。還元代わりにその場所に機能主義が用意したのが「実現」(realization) という概念であった。

二つの性質が一体となって物理的基盤に同一化される還元と違い、実現は、ある性質が他の性質に存在論的に依存し、それによって実在化することを意味している。実現の本質はこのように性質間の存在論的依存性にある。ボルガーとシャピロは共著『多重実現可能性ブック』(2016)の中で、この点について次のように述べている。

「実現とは何か。まず、実現とは形而上学的な依存関係である。非還元的物理主義者にしたがうならば、実現とは脳と心の形而上学的依存関係である。我々の目的から重要なことは、脳状態による心的状態の実現が、「実現」の通常の意味が示唆しているように、心的状態を「実在化する (make real)」という考え方にある。そのため、我々が想定している形而上学的依存性はしばしば、依存しているものの存在がなければ依存される対象の存在もないというように存在論的依存性と呼ばれている。例えば、デスクトップや脚がなければ机は存在しない——机はその部分であるデスクトップや脚に依存しているというように」(Polger & Shapiro 2016, p. 19)。

ここで強調されているのは、最後の机の例に示されているように、デスクトップや脚に「依存している」関係にあるからこそ、机は実在化しているということにある。ただし、机の例は存在論的依存性の一例にすぎない。存在論的依存性は、机のような構成的依存性 (compositional dependence) や、彫刻とブロンズ像のような構築的依存性 (constitutional dependence)、金と原子番号 79 のような同一性 (identity) などいくつかの種類に分かれ、心の哲学が対象としている心的状態と脳状態との関係は実現依存性にあたっている。すなわち、実現は存在論的依存性のなかのひとつである。それでは、存在論的依存性のひとつである実現が、還元概念にどのような修正を迫ったのだろうか。ポルガーとシャピロによれば、実現は次のように定義される。

「実現：P が機能  $F_g$  をもつとき、かつそのときに限り、P は G を実現する」(ibid. p. 22)。

すなわち、「G を実現することは、G を構成する機能、G 機能をもつこと」である。この機能を P が実現するのであれば、実現関係は、実現者 P が被実現者 G を実現するという関係となる。ウムト・バイサンは、実現関係の関係項を、實在カテゴリーにそくして、性質、種、タイプ、状態、(性質)事例、事象、トークンなどに分けている。非還元的物理主義や非還元的個人主義は、そのうちの性質や(性質)事例間の実現関係を取り上げている。バイサンにしたがうならば、性質と(性質)事例の実現関係は次のように定式化することができる (Baysan 2015, p. 20)。

- ① 性質間の実現関係：P の例化が Q の例化を例化実現するとき、かつそのときに限り、性質 P は性質 P を性質実現する。
- ② (性質)事例間の実現関係：P が Q を性質実現するとき、かつそのときに限り、P の例化は Q の例化を実現する。

例化は、トークン事象の性質個体化というように具体的に考えることができる。いずれにしても、この二つの実現関係から実現とは性質の実現であることがわかる。ここで大事なことは、性質間の依存関係が、「P が Q を実現するとき、Q が P を実現することはない」という非対称性 (asymmetric) を特徴としていることである。因果関係はこのように、P が原因となり、Q はその結果という関係であり、その逆を想定することはできない。機能主義の立場に立つかぎり、心の哲学で言えば、心的性質は物理的性質が原因となって実現され、非還元的個人主義で言えば、社会的性質は個人的性質が原因となって実現されることになる。後に述べるように、実現関係を基礎に提案されたスーパーヴィニエンスが性質間の共変化を特徴としているという場合でも、その意味は、性質 A が変化すれば、性質 B も変化するこ

非還元的個人主義について再考する

とであって、性質 B が変化すれば、性質 A も変化するというのではない。このことは、共時的創発性理論を考える場合、上向き因果と下向き因果の関係とかかわっており、非常に重要な意味をもつことになる。

実現関係を議論するにあたって注意しなければならないのは、実現方法の多様性である。比喩的に言えば、居室を温める暖房機能は、床暖房を使っても、空調機や、ガストーブ、炬燵を使ってもかまわない。その方法は多元的で、どの方法も部屋を暖める機能を十分にもっている。遠方に移動する場合でも、その手段として陸海空のいずれかの交通手段を使うことができるし、それらを組み合わせることも考えられる。実現関係論は、目的を実現する機能方法が多重であることを最初から組み込み、この前提で立論されていることに注意しておきたい。

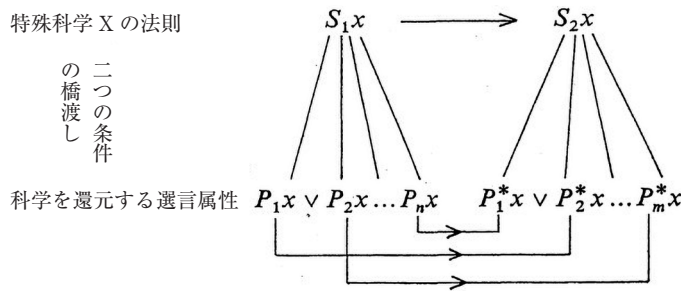
さて、実現関係のこの主張によって還元批判に成功したといえるだろうか。すなわちキムが主張する実現が多重的に行われている場合でも、物理主義に立ち続ける以上、物理的基盤に還元されるという原則を否定することはできないのではないかという機能的還元による反論に、多重実現性論は正面から対峙できていると言えるだろうか。そうであると言い切ることは到底できない。何故なら、実現方法が多重であることによって、タイプ同一性を否定することはできても、ただちに還元の否定につながるというわけにはいかないからである。還元を否定するためには、実現方法が多様であるばかりでなく、その方法を自ら選ぶ「選言」がスーパーヴィニエンスと一体となって、還元的物理主義の構造を根本的に変えることが必要となる。しかし、それも、消去的還元批判のかぎりであって、社会的創発性を論証するという別の課題に有効であるかどうかは別問題である。

#### Ⅳ 非還元的個人主義の立論構造 (2)：スーパーヴィニエンスと多重実現可能性

還元的物理主義の批判に非還元的物理主義が反論できるとすれば、物理主義の立場をとりつつ、非還元的でもある道を模索することしか残されていない。問題は、非還元的方向性をたどる道がそれに値するものになっているかどうかということにある。還元的物理主義者キムが機能的還元の立場から非還元的物理主義では本質的な還元批判になっていないと評価しているのに対して、キムとは反対の批判的实在論の立場から見ても、還元批判は不徹底であるという評価となる。そのことは、非還元的物理主義ばかりでなく、非還元的個人主義についても同様である。

非還元的物理主義にしても、非還元的個人主義にしても、還元主義批判を可能にすると考えられたのが、実体の性質に注目した機能主義 (functionalism) と、そこから派生するスーパーヴィニエンス手法であった。還元主義を批判するためにヒラリー・パトナム、ジェリー・フォダーなどが提唱したこの概念は、性質 A と性質 B が共変関係にある状態を指し

第 3 図 多重実現可能性



(出典) Fodor, Jerry (1997), p. より作製

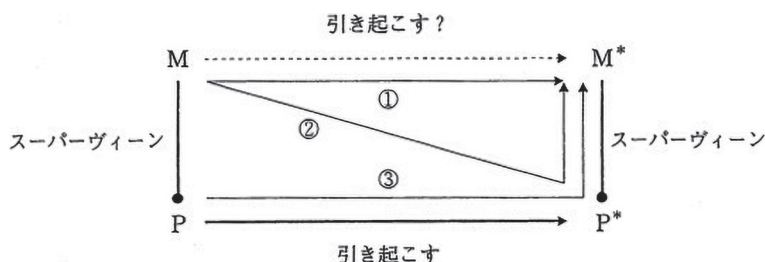
ている。すなわち、ある世界（可能世界であれ、任意の世界であれ）において、「そこに属する個体  $x$  と  $y$  について、 $x$  と  $y$  が性質  $B$  において区別することができないのであれば、性質  $A$  についても区別することができない」状態がスーパーヴィニエンスと呼ばれている（太田 2006, 33 頁）。スーパーヴィニエンスの意義は、太田が言うように、「物理主義の枠内において心的因果がなぜ可能となるのかを、心的なものを物理的なものに還元することなく説明する有効な手立て」（太田 2010, 39 頁）ということにある。機能主義が登場してから、還元的物理主義と非還元的物理主義の対立は、実体間の関係ではなく、実体をもつ性質間の関係をめぐる対立へと変化していった。還元的物理主義が、心的性質を物理的性質に還元することによって性質一元論の立場をとろうとするのに対して、非還元的物理主義は、心的性質と物理的性質を区分する二元論の立場をとることで、還元依存しない経路を探ろうとしていた。

心の哲学において、機能主義は、「～であるという性質」をもつ物理的性質を 2 階に、「～であるという性質をもつ性質」である心的性質を 3 階に置き、2 階の性質が 3 階の性質を実現することで因果的効力を発揮すると考えられていた（実体それぞれの性質をもつ 1 階にある。通常、性質だけに注目し、2 階を 1 階に、3 階を 2 階に置くことで論じる場合が多い）。機能とはこのように、因果的効力を発揮する、それぞれの実体をもつ性質、すなわち機能的性質のことを指している。機能主義が注目されたのは、還元であれば、心的性質  $M$  と物理的性質  $P$  とが同一関係にある ( $M=P$ ) ことしか想定できないのに対して、第 3 図のように、両者の関係はひとつではなく、多元的に実現されることを想定することができるからである。心的性質と物理的性質がタイプ同一性であれば、両者は還元関係にあるというだけで十分なのかもしれない。しかし、両者がそれぞれの性質に応じて多様な対応関係にあるトークン同一性であるならば、還元とは別の関係を想定しなければならなくなる。実体をもつ性質に注目するのは、タイプ同一性からトークン同一性の議論への移行を可能にしているからである。

第 3 図は、ジェリー・フォダーが『特殊科学』の中で、特殊科学  $SX$  とその基盤  $PX$  との関係を描いた図の一部を切り出したものである（選言を意味する  $\vee$  については後述）。還元



第4図 スーパーヴィニエンス因果性



(出典) 太田雅子 (2010)『心のありか——心身問題の哲学入門』41 頁

が、基盤である  $P_1X$  によって  $S_1X$  が決定され、同一化する関係にあるのに対して ( $S_1X \Leftrightarrow P_1X$ )、この図では、 $P_1X, P_2X, \dots, P_nX$  というように、多数の基盤が存在し、 $SX$  はその基盤のひとつによって多元的に依存し、実現される関係にあることを示している。

ソーヤーは、このような心の哲学で論じられてきたスーパーヴィニエンスが果たす役割を社会的領域にも適用することについて次のように述べている。

「スーパーヴィニエンス因果性：社会的性質は自律的という意味の因果的力を持っていない、何故なら、その因果的結果は個人的スーパーヴィニエンス基盤の実現の点にあるからである。しかし、社会的性質  $S$  は、 $t_1$  の時点でのスーパーヴィニエンス  $I$  を持つことで、 $I$  が  $I^*$  の原因として法則的に同定することができなくても、 $t_2$  時点での社会的性質  $S^*$  と、個人的性質  $I^*$  の原因として法則的に明らかにすることができる」(第1図参照, Sawyer 2002b, p. 207)。

しかし、このようなスーパーヴィニエンス因果性では、ウェーバー的な主意主義的行為理論にしかならず(バスキアの言う転態モデル I)、形式的に上向き因果を一方的に主張しただけにしかならないのではないだろうか。

このようなスーパーヴィニエンスの役割を、心の哲学で行われた還元的物理主義と非還元的物理主義の対立状況からあらためて確認しておくことにしよう。非還元的物理主義の論理構造を援用することで非還元的個人主義を論じようとするソーヤーの議論を正確につかまえるために、この確認は必要である。この点について、太田雅子『心のありか、心身問題の哲学入門』がまとめた整理を行っている(第4図参照)。

この図は、心的性質  $M$  が新しい心的性質  $M^*$  に転換する経路が三つあることを示している。第2図で見たように、非還元的個人主義者が想定する社会的性質  $S$  から別の性質  $S^*$  への経路が二つあったように、非還元的物理主義者が想定する  $M$  から  $M^*$  への経路も二つあることが示されている(①と②の経路)。この二つの経路に対して還元的物理主義者が想定するのは③の経路である。 $M$  は  $P$  にスーパーヴィーンし、更にそこから  $P^*$  に例化し、そこ

を起点に  $M^*$  へスーパーヴィーンするという経路である。とくに②の経路は、還元的物理主義者からすれば、 $M$  を起点にしているにもかかわらず、その物理的基盤  $P$  を通過しておらず、物理主義の根本的原理に抵触しており認められないことになる（なお、①の経路は、非還元的物理主義においても微妙であることから、ここでは②の経路についてだけ見ておくことにする）。

3 の経路は、心的性質  $M$  が  $M$  から  $P$ 、更に  $P$  から  $P^*$  を通過しなくても、 $M^*$  に転換することが可能な経路を示している。先のソーヤーの「心的性質の実現する物的性質と、原因づけられた物的性質との間に法則的、因果的性質がなかったとしても」という指摘がこれに該当する。すなわち  $M$  が  $P^*$  にスーパーヴィーンし、更にそこから  $M^*$  にスーパーヴィーンする経路である。この経路に対して、還元的物理主義者がこの経路を批判する基本原理は二つある（所謂「スーパーヴィニエンス論法」）。ひとつは、「物理的なものにはそれが起こるのに十分な物理的原因があり、その原因をどこまでたどっていても物理的なものの外に連れ出されることはない」という「心的因果の物理的閉包性」の原則、もうひとつは、「同じ結果に心的原因と物理的原因がある場合、もしその結果が起こるのに物理的原因だけで十分であるならば、心的なものに残された因果的役割はない、すなわち排除される」という、所謂「因果的排除問題」である。還元的物理主義からすれば、原因が二つある（過剰問題）ことは認められない。非還元的物理主義も、還元的物理主義と同様、心的性質は何らかの物理的性質を基盤として持つという物理主義の立場に立つ以上、「心的因果の物理的閉包性」はもちろん、「因果的排除問題」の解決策も本来なら認めなければならないはずである。したがって、非還元的物理主義には、物理主義の立場に立ちながら、心的原因と物理的原因のどちらかの選択を迫られるという現実と直面したとき、なぜ心的因果を優先することができるのかという疑問に答えることが求められる。非還元的物理主義は、物理主義の立場に立ちながら、心的性質の独自な存在を主張している以上、心的因果の優先をその主張に内在しているため、そのままではこの疑問に答えることができない。言い換えれば、物理主義の立場に立っているにもかかわらず、物理的原因が優先される「因果的排除問題」を無視する論理が問われている。この問題が現実的なのは、②の経路、③の経路とも、 $P^*$  を通過することで  $M^*$  に辿り着いているからであり、物理的因果なのか、心的因果なのか、すなわち、 $P^*$  の意義が問われているからである。②の経路が選択されるなら、心的原因が優先され（ $M \Rightarrow P^*$  であるから）、③の経路なら物理的原因が優先されることになる（ $P$  や  $P^*$  であるから）。還元的物理主義の立場からすれば、二つの原則を徹底することが還元主義の道となる以上、「因果的排除問題」を解決するのは物理的原因を優先する③の経路しかありえない。法則に適用という理由はここにある。還元的物理主義が、物理主義でありながら、還元的でもあるのは、この二つの原則を徹底させているからである。したがって、還元的物理主義の立場からすれば、物理主義の二つの原則と抵触する②の経路はありえないことになる。

この図は言うまでもなく機能主義を前提に作図されている。この図で最も重要なのは、ある心的性質  $M$  が  $P$  ばかりでなく、 $P^*$  にも多重的にスーパーヴィーンしていることである。②の経路について考える場合、 $P^*$  から  $M^*$  ヘスーパーヴィーンしていることから、 $P^*$  はどこが原因となっているのかを探ることが重要となる。その原因は、 $M$  から  $P^*$  ヘと、 $P$  から  $P^*$  ヘの二つがある。後者の場合、物理的因果関係から  $P^*$  から  $P$  につながり、 $M$  ヘスーパーヴィーンする関係にある。その関係を考えるならば、 $P^*$  を生み出しているのは、どちらの場合も  $M$  が原因となっていることがわかる。 $M$  から  $M^*$  ヘの③の経路は、そのことを含んだ、心的性質  $M$  と別の心的性質  $M^*$  との関係と理解することができる。そのことからすると、③の経路は②の経路に包摂されているということもできるかもしれない。

## V 非還元的個人主義の立論構造 (3)：選言と下向き因果

「 $I$  が  $I^*$  の原因として適法に同定することができない場合であっても」ということは、「 $S$  が  $I$  にスーパーヴィーンしなくても」という理解 ( $I$  と  $I^*$  の関係は  $S$  と  $I$  との関係につながっているから) を生み、更に、「いろいろな性質によって多重的に実現することでもかまわない」という理解へと発展していった。ソーヤーがフォダーの「特殊科学論」に注目し、スーパーヴィニエンスの論理と多重実現可能性を結びつけたのもこの理解を進めるためであった。多重実現可能性は、比喩的な言い方をすれば、話者の意図を伝えるために訳語は一つでなくてもかまわない、状況に合わせて言葉が使い分けされるように、言葉は複数あるほうが、当該状況の全体理解につながりやすい。しかし、それだけで十分かと言えばそのように言い切ることもできない。ソーヤー自身、「多重実現可能性だけでは、必ずしも非還元性を意味することにはならない」ことを率直に認めている (Sawyer 2005, p. 67)。多重実現可能性はせいぜい機能的還元の反論に直面して還元方法を多様化したにすぎず、ソーヤーもこれでは根本的反論になっていないことを認識していた。だからこそ、ソーヤーは、その一方で、「スーパーヴィニエンスが粗野な選言によって補足されているとき、我々は、一定の社会的特性や社会的法則が非還元的となる理由を明らかにする創発性の説明を我々は持つことになる。それぞれのトークン事例における個人的特性のつながり対してスーパーヴィニエントな社会的特性はあるかもしれない、しかし、そうした特性のそれぞれの例は個人的特性の異なる結合によって実現されるかもしれない」と述べ、多重実現可能性に選言を加えることによって、還元主義批判を更に一步進めることを意識していた。

ソーヤーが非還元的個人主義を論じるにあたって依拠したのがジェリー・フォダーの「特殊科学論」、すなわち、すべての事象がその基盤として物理学に還元されるのではなく、それぞれの科学が特殊科学として独自性をもつことを論証しようとしたフォダーの議論であった。ソーヤーはフォダーの議論を社会的創発性の論証手続きとして積極的に用いようとしていた。

フォダーの議論の核心は、還元を基礎づけているネーゲル的な「橋渡し法則 bridge law」( $S_1X \Leftrightarrow P_1X$ , 或いは  $S_2X \Leftrightarrow P_2X$ ) を、次のような「選言」形態、すなわち橋渡し法則が法則とはならない状況を想定し、その可能性を探ることである。

$$S_x \Leftrightarrow P_1X \vee P_2X \cdots \vee P_nX \quad (\vee \text{ は選言を表わす})$$

この定式の意義は、フォダーが言うように、「S を充足する X からなるすべての事象は、選言  $P_1X \vee P_2X \cdots \vee P_nX$  に属するいくつかの基盤を充足する X からなる事象と一致するものと読まれる」(Fodor 1974, p. 108) ということにある。言うまでもなく、ここで言う一致とは還元主義が主張する同一性を意味しない。S は様々な基盤から適切なものを選び、それと一致する可能性があるという意味で選言は用いられている。このように選言とは、心的性質がどの物理的性質によって実現されるのかが「選ばれる」ことである。フォダーによれば、選言が成立するならば、 $P_1X \Rightarrow P_2X$  という物理法則の否定にもつながることになるという。心的性質が物理的性質 1 によって実現されるのであれば、それが心的性質の実現性質として選ばれたことになる。そのことは、選択肢が多数あるということのみならず、物理的性質 1 であっても、物理的性質 2 であっても、物理的性質 N であってもかまわない多重実現可能性の範疇をはみ出し、どの基盤がよいのかが「選ばれる」別の世界に踏み出したことを意味している。そこにあるのは、どの性質にスーパーヴィーンするのがよいのかという選択の問題である。そこには、スーパーヴィニエンスをはみ出す可能性が秘められている。スーパーヴィニエンスが性質間の依存関係にもとづいているとすれば、選言は一方的な依存関係ではなく、「何に依存するのか」という選択が入り込んできたことで、その関係に一定の変化をきたすことになる。それでは、この変化によって、非還元ということは意味しても、社会的性質に創発特性という性格を刻印するまでの変化を意味することになるのだろうか。

フォダーは、選言の定式から先に見た第 3 図を導き出すことができるとしている。

この図で最も大事なものは、選言が、下部に描かれている「 $P_1X \vee P_2X \cdots \vee P_nX \Rightarrow P_{1*}X \vee P_{2*}X \cdots \vee P_{n*}X$ 」というように発展していくことである。特殊科学の基盤が選ばれるだけでなく、特殊科学が発展する際、その基盤にも選言の変化が見られるようになる。フォダーはこの変化を、「 $(P \supset R)$  及び  $(Q \supset S)$  の形態の前提から  $(P \vee Q) \supset (R \vee S)$  形態の結論への議論が有効である」というように部分集合の議論へつなげている (Fodor 1974, p. 109)。

ここで大事なことは、選言が上向き因果の性格にかかわる問題でしかないことである。心的性質にしても、社会的性質にしても、それらが創発特性をもつものと評価されるのは、上向き因果と下向き因果を同時に備えた全体的因果力をもつということにある。そうでなければ、それらの性質を創発特性と呼ぶことはできない。そのことからすると、選言によってもたらされた上向き因果の性格変化が、下向き因果の変化までつながるのが問題となる。す

で述べたように、スーパーヴィニエンスに性質間の非対称的な依存関係（A 性質の変化が B 性質の変化をもたらしても、逆は成立しない）があるのであれば、本来、上向き因果の変化が下向き因果の変化をもたらすことはない。選言によってこうしたスーパーヴィニエンスがもつ非対称的關係を打ち破ることができると言えるのだろうか。

下向き因果は創発主義の意義を探る上で非常に重要な意味をもっている。還元的物理主義者キムが、「創発特性の議論に何らかの意義があるとすれば、創発特性はそれらが含まれている事象に影響を及ぼす力を備えた、因果的に効果のある特性でなければならないということにある。その場合、創発特性はどのようにその因果力を表明することができるのだろうか」と述べ、非還元的物理主義が主張する下向き因果が成立するかどうかを精査している。

下向き因果とは、「どの性質も例化されるよう原因づけるには、その性質（創発的にしても、結果的にしても）が生じる基盤条件を原因づけるものでなければならない」という原理である。すなわち、上向き因果が基盤条件によって高い次元の性質を原因づけるのに対して、下向き因果は逆に、高い次元の性質が基盤条件を原因づけることである。すなわち、創発主義者からすれば、下向き因果と上向き因果が同時に成立するところに意義がある。仮に下向き因果がこのような意義をもって成立したのだとすれば、スーパーヴィニエンスがもつ非対称性が突き崩されたことになる。逆言すれば、下向き因果が成立しなければ、高い次元の性質は因果的効力を発揮できないことになる。

この問題の核心にあるのは、「原因づける」ということの意味である。下向き因果にとってこの問いが重要なのは、B が A の原因であると言うとき、それは、B が A を条件づけているとか、原因となっているということであって、下向き因果には、A が B を説明したり、条件づけたり、原因づけることではないという不可逆性原理と抵触する可能性があるからである。すなわち、上向き因果が原因となっているとき、下向き因果をあたかも原因と考えることは、不可逆性原理のパラドックスに陥るのではないかという可能性である。上向き因果と下向き因果のパラドキシカルな特徴を強く意識していたのは還元的物理主義者キムであった。すなわち、「高い次元の特性が低い次元の条件に影響を及ぼすとすれば、どのように高い次元は低い次元の条件から創発するのだろうか」という循環性に陥る危険性である。この危険を、通時的創発性を論じることによって解決しようとすることは意味がない。問いは共時的になされているからであり、その答えもまた共時的に見つけなければならない。また、二つの創発性の間に移行性があるという議論も、論点をずらしているだけで意味がない。かろうじて言えるのは、通時的下向き因果であれば、その因果性は十分に成立するということだけである。

ソーヤーが提唱する非還元的個人主義は、不可逆性パラドックスという下向き因果が抱える問題を共時的に解決することに成功していない。創発主義を自認する者なら誰しも、下向き因果が創発性の核心をなしていると信じている。ソーヤーもその一人である。それにもか



かわらず、彼の非還元的個人主義はそれに成功していない。社会は個人に外的制約を与える「社会的事実」と考えていたデュルケムを創発主義者として再読しようとしたソーヤーの姿勢がここに現れている、とすることができるかもしれない。

## VI 終わりに

これまで見てきたように、還元的物理主義に対する非還元的物理主義や非還元的個人主義による批判は、機能主義を前提に、性質二元論の視角から、実現を還元に代わる概念として追求してきた。批判的实在論から見て、この試みは、社会的創発性を論証する上で成功したと言えるだろうか。

批判的实在論者エルダー・バスは、「社会的創発性：関係論的、或いは機能論的？」と題する論文の冒頭で、ソーヤーとの立場の違いを次のように要約している。

「本論文の主張は、関係論的創発性理論の概要を明らかにすること、キース・ソーヤーが提唱する機能論的理論以上に実りある形でその適用が可能であるということにある。ソーヤーは、社会的特性の粗野な選言、多重実現可能性によって、社会科学における因果的説明に向けた非還元的アプローチに正当性があることを主張している（ただし、存在論的個人主義の立場から）。それに対して、本論文は、第1に、彼が論じている社会的特性は粗野な選言にはあたらないこと、第2に、我々は、因果力の批判的实在論的説明とつながった関係論的創発性によって、より効果的にその因果的重要性を説明できることを論じている。こうした特性は多重的に実現することができるものの、それらは、多重的に実現できるから創発的なのではなく、それにもかかわらず創発的なのである」(Elder-Vass 2014a, p. 5)。

エルダー・バスがこの論文を書いたのは、どちらも批判的实在論者であることを自認しながら、エルダー・バスの関係論的創発性理論とソーヤーの機能論的創発性理論では社会的創発性を論証する上で大きな違いがあること、多重実現可能性、選言によって社会的創発性を論証しようとしたソーヤーの非還元的アプローチではその論証に無理があることを明らかにするためであった。エルダー・バスの結論は、引用末尾に述べられているように、「多重的に実現できるから創発的なのではなく、それにもかかわらず創発的なのである」。すなわち、彼の主張の中心にあるのは、因果力の批判的实在論的説明とつながった関係論的創発性である。

それでは、エルダー・バスが言う関係論的創発性とはどのようなものだろうか。彼はオーケストラの例を挙げ、社会的創発性が現れる上で組織化が果たす意義を訴えている。

「オーケストラはその構成員である音楽家と彼らの楽器からなる社会的实在である。各音

非還元的个人主義について再考する

楽家は、バイオリニスト、トランペット奏者、指揮者といった一定の役割を担っている。その役割は、他の音楽家、他の道具、スコアとの関係においてどのように演奏するかという規範のようなものであり、すべての当該音楽家がこうした規範に従い、集団は複雑な調和した音楽を演じる集団的力を持っている。これは、全体としての集団が持つ因果力であるが、彼らが集団に組織化されていなければ、個々のメンバーでは持ちえないものである。あるレベルで、調和した音楽を作るためにこうした相互作用がどのように集団力を生み出すのかを説明するものの、しかし、こうした個人がこうした性格のより大きな社会的実在に組織されていなかったとすれば、この力を生むメカニズムを完全に説明することのできるけれども、個人の因果力ではなく、組織の因果力である」(ibid., p. 9)。

最後に指摘されているように、オーケストラの創発的力が生み出されるのは、「個人の因果力ではなく、組織の因果力」、すなわち、組織化(organization)である。個々の演奏者の技量が高いことは前提にある。そのかぎりでは、個人(主義)を起点にしてもかまわない。しかし、奏でる音楽が聴衆の感動を呼ぶのは、演奏者がある規範にしたがい、ハーモニーを生み出すよううまく組織されているからである。エルダー・バスが強調するのはこうした組織化である。オーケストラは、形式的には、各演奏家がそれぞれのパートを受けもって集まる集団にすぎないかもしれない。しかし、創発性はたんなる集計以上のものである。問題は、それがどこから生まれるのかということにある。この点について、エルダー・バスは次のような大事な指摘を行っている。

「このアプローチの結果のひとつは、多くの哲学者が行っている説明より、関係論的説明の中で実在が非常に大きな役割を果たしているということにある。関係論的創発特性は常にトークン実在の特性であり、それらは常にそれらを持っている実在の構成とか構造から発生している。すなわち、実在の諸部分、その特性、それらの関係から、本論文で私は、それらをこうした実在に構成している諸部分間の関係に沿って、トークン実在の完全な諸部分集合を実在の構成基盤と呼んでおくことにする。その場合、関係論的創発特性は常に、それを持つ実在の構成的基盤に依存している」(ibid., p. 7)。

エルダー・バスが言う関係論的創発性を支えているのは、個々の演奏家というオーケストラの諸部分、それぞれの実在がオーケストラ全体と結ぶトークンの関係という構成基盤である。組織化とは、この構成基盤を支える規範といったようなものである。すなわち、オーケストラが聴衆の感動を呼ぶ創発性基盤は、個々の実在による構成的基盤という様々なサブ集合とその組織化である。それは高い階層がもつ特性である。エルダー・バスは、組織化の重要性から次のように結論を述べている。

「スーパーヴィニエンス創発特性は特性を持つ実在の構成基盤のサブ集合——創発性基盤——に依存していると言えよう。したがって、同じ特性は、その諸部分や構造が特性の創発性基盤をサブ集合として含んでいるかぎり、様々な部分と構造とのトークンにおいて実現することができる。高い階層の特性の多元的実現性は、様々な実現のすべてにおける同じメカニズムを基礎にもとづいて関係論的に創発的である特性と一致していることになる」(ibid., p. 14)。

批判的実在論の視座から社会的創発性を検証しようとする場合、エルダー・バスがここで述べている創発性基盤からどのように創発性が生まれるのか（組織化されるのか）という課題に答えることが必要となる。そのためには、共時的創発性理論を構築する課題の一環としてこの問題に取り組むことが必要となる。この課題は、紙幅の関係から、次の機会に譲りたい。

#### 参 考 文 献

- Baysan, U (2015), Realization relation in metaphysics, in *Mind and Machines*, University of Glasgow.
- Bermudez, Jose Luis (2020), Fodor on Multiple Realizability and Nonreductive Physicalism: Why the Argument Does not work. *Theoria. An International Journal for Theory, History and Foundations of Science*, 35-1.
- Clayton, Philip and Davies, Paul (ed.) (2006), *The Re-Emergence of Emergence*, Oxford UP.
- Elder-Vass, Dave (2007), For Emergence: Refining Archer's Account of Social Structure. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 37-1.
- (2010), *The Causal Power of Social Structures Emergence, Structure and Agency*, Cambridge UP.
- (2014a), Social Emergence: relational or functional? , *Balkan Journal of Philosophy*, vol. 6, issue 1.
- (2014b), Social Entities and the Basis of Their Powers, Julie Zahle and Finn Collin (ed.), *Rethinking the Individualism-Holism Debate*, Springer.
- (2015), Emergence and the Realist Account of Cause, *Journal of Critical Realism*, 4-2.
- (2019), Realism, values and critique, *Journal of Critical Realism*, 18-3.
- Cresswell, M. (2021), Sawyer's theory of social causation: a critique, *Philosophy of the social science*, 51-3.
- Epstein, Brian (2009), Ontological individualism reconsidered, 166.
- (2014), What is Individualism in Social Ontology? Ontological Individualism vs. Anchor Individualism, Collin, Finn and Zahle, Julie (ed.), *Rethinking the Individualism-Holism Debate: Essays in the Philosophy of Science*, Springer.
- Fodor, J. A (1974), Special Science (or: The Disunity of Science as a working Hypothesis), *Synthese*, 28-2.
- Gillett, Carl (2002), The dimensions of realization: a critique of the standard view, *Analysis*, 62-4.
- Greve, Jens (2013), Response to R. Keith Sawyer, *Philosophy of the Social Sciences*, 43-2.

- Hertwig Mervyn (ed.) (2007), *dictionary of critical realism*, Routledge.
- Hulswit, Menno (2006), How Causal is Downward Causation? , *Journal for General Philosophy of Science*, 36.
- Kim, Jaegwon (1993a), The myth of nonreductive materialism, in: *Supervenience and Mind*, Cambridge UP.
- (1993b), *Supervenience and Mind Selected Philosophical Essays*, Cambridge UP
- (1999), Making Sense of Emergence, *Philosophical Studies*, 95.
- (2006), Emergence: Core ideas and issues, *Synthese*, 151.
- Navarrete, Christian and Freyer, Tom (2024), Redefining emergence: making the case for contextual emergence in critical realism, *Journal for Theory of Social Behaviour*, no. 54.
- Polger, T. W.& Shapiro, Lawrence A (2016), *The Multiple Realization Book*, Oxford UP.
- Porpora Douglas (2007), On Elder-Vass: Refining a Refinement, *Journal for Theory of Social Behaviour*, 37-2.
- Pratten, Stephen (2013), Critical Realism and the Process Account of Emergence, *Journal of the Theory of Social Behaviour*, 43-3.
- Ross, Lauren N. (2019), Multiple Realizability from a Causal Perspective, *Philosophy of Science*, 87.
- Sawyer, Keith (2002a), Nonreductive Individualism part I -Supervenience and Wild Disjunction, *Philosophy of the Social Science*, 32-4.
- (2002b), Nonreductive Individualism part II-Social Causation, *Philosophy of the Social Science*, 33-2.
- (2005), *Social Emergence Societies as Complex Systems*, Cambridge UP.
- (2010), Response to “Emergence in Sociology”, *Philosophy of Social Science*, 42-2.
- Sober, Elliott (1999), The Multiple Realizability Argument Against Reductionism, *Philosophy of Science*, 66.
- アーチャー, マーガレット (2007) 『实在論的社会理論』(佐藤春吉訳), 青木書店
- 太田雅子 (2006) 「心的因果から心的説明へ」『思想』982号
- (2010) 『心のありか 心身問題の哲学入門』勁草書房
- 柏端達也 (2006) 「選言化する心と二元論的世界」『思想』982号
- キム, ジェグオン (2006) 『物理世界のなかの心 心身問題と心的因果』(太田雅子訳), 勁草書房
- サール, ジョン (2018) 『Mind』(山本貴光・吉川浩満訳), ちくま学芸文庫
- (2008) 『ディスカバー・マインド 哲学の挑戦』(宮原勇訳), 筑摩書房
- セイヤー, アンドリュー (2019) 『社会科学の方法 存在論的アプローチ』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版
- ダナーマーク, バース他 (2015) 『社会を説明する 批判的实在論による社会科学論』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ書店
- 柴田正良 (2006) 「機能的性質と心的因果——キムの還元主義を越えて——」『思想』982号
- バスカー, ロイ (2006) 『自然主義の可能性——現代社会科学批判』(式部信訳), 晃洋書房
- (2009) 『科学と实在論 超越論的实在と経験主義批判』(式部信訳), 法政大学出版局
- 美濃正 (2004) 「心的因果と物理主義」信原幸弘編『シリーズ心の哲学 I 人間篇』勁草書房
- 山崎かれん (令和2) 「実現関係を論じる二つの立場とその対立」東京大学教養学部哲学・科学史部会『哲学・科学史論叢』22号